

11月26日(土)に鈴鹿医療科学大学で「みえの現場・すごいやんかトーク大学編」を開催しました。

当日は、「地域のために私たちができること～ボランティア活動を通じて～」というテーマで、ボランティア委員会の学生など、各学科の学生15名と知事が意見交換を行いました。



(活動内容の紹介及び自己紹介)

最初に、ファシリテーターの貴島教授から、大学のボランティア活動のきっかけについて、平成16年に発生した海山町の水害で、災害ボランティアとして学生が参加したことをきっかけに、大学にボランティア委員、ボランティアセンターが立ち上がり、現在では、地域で、障がい者や子どもたちとの交流を目的に、学生サポーター、行事やイベントの手伝いなど、幅広い活動を行っていることが紹介されました。

引き続き、学生の自己紹介では、日頃の活動の紹介とともに、医療分野を志した志望動機について、「部活動で、けがをした時にお世話になったリハビリの先生との出会い」「自分の家族や身近な人の介護や病気の世話の経験がきっかけ」「中国で医師免許を持っていて臨床経験があるが、それを日本でも生かすことができるようにしたいため」など、一人ひとりから紹介がありました。

トーク参加者及び活動内容について

○ ファシリテーター

保健衛生学部医療福祉学科

貴島 日出見 教授

●見学交流会推進実行委員会(そりとん)

理学療法学科 3年 佐藤 直彦

●ボランティア委員会

医療福祉学科 2年 木本 真奈実

2年 森 大地

放射線技術科学科 2年 早田 亜紀

医療栄養学科 1年 黒田 孔美

鍼灸学科 1年 瀧本 裕美子

理学療法学科 1年 杉浦 聖人

1年 西口 あすか

●大学祭実行委員会

医療福祉学科 2年 山際 千晴

●その他

医療福祉学科 3年 森 日都美

4年 天野 千晴

鍼灸学科 3年 王 桂鳳

薬学科 4年 角井 綾希子

医用情報工科 3年 谷 貴寛

臨床工学科 4年 中平 雄太

三重県内の大学生が東日本大震災の被災者支援のために立ち上げた「三重学生災害支援団体(チームM)」でボランティア活動を行っている学生からは、チームのメンバーのTシャツを知事にプレゼントする場面もありました。



プレゼントされたTシャツを着る鈴木知事

(活動を通じて感じたこと)

次に、それぞれの活動を通じて、地域の人たちと関わる中で感じたことについては、「震災ボランティアを通じて福島大学との交流ができ、台風12号で三重県が被害を受けた際に、『お世話になったお礼に力になりたい』と、三重県に災害ボランティアに来てくれた。“つながり”の強さが大事だと改めて感じた」「自閉症や精神障害を持っている人たちに対する一般の人々の偏見を無くし、たくさんの人たちの理解が得られるようにすることが必要」「特別養護老人ホームでのボランティアの際に、施設の中では、孤立してつながりがなくなっていると感じた」との思いが語られました。

さらに、「今後、コメディカルとして医療の現場で患者さんや、高齢者や障害者の方たちと係わる際には、相手の立場にたった視点が大切」「薬剤師の在宅医療への参画や東洋医学（鍼灸、漢方）の活用など、特に県南部などの医師不足の地域で、未病、軽医療への対応など活躍する場がもっとあるのではないかと」との意見も出されました。

(県として今後対応してほしいこと)

県に対応を望むこととして、「医療体制、救急体制の充実に力をいれてほしい。」「薬学部を卒業後の就職が不安」「交通の便、交通マナーの向上をめざすべき」「精神障がい者への偏見をなくす取組を三重県からして行ってほしい」「東洋医学をスポーツ医学などの分野などでもっと活用してほしい」「発達障害の子どもたちのための施設の充実や地域の人たちとの交流の場を増やしてほしい」「捨て犬、捨て猫を殺処分しなくて済むような里親制度などのしくみの整備を進めてほしい」「地域で、障がい者や、高齢者が快適に住める環境になってほしい。」「元気な高齢者や働きたいと思う障がい者が働けるような雇用環境を整備してほしい」「障がい者スポーツのアスリートへの支援を充実してほしい。」「盲導犬や介助犬の普及に対する制度を充実してほしい」などの意見が出されました。

知事から皆さんへのメッセージ

最後に、知事からは、医療や福祉の分野で思いを持って頑張っていた皆さんの声を聞いて、行政でできることは、対応していきたい。若い人たちが、それぞれ意志を持って歩もうとしている姿を見て、たいへんうれしく、今後に期待できると感じた。今日のトークの中では、キーワードとして「つながり」という言葉が出てきたが、地域には、皆さんと同じように熱い思いをもって、地域を良くするために活動している方がたくさんいる。そういう人たちからは、若い世代に活動が広がらないという悩みを聞くが、一方で若い世代でこんなに頑張っている人もたくさんいるので、ここを何とかつなげていきたいと思う。様々な世代の人たちと皆さんがコラボしたり、同じ思いで活動する人たちの橋渡しを担ってもらえるようになると、もっと良くなるのではないかと感じた。これからは、是非同じ世代や同じ価値観の人たちだけでなく、異なる価値観を持った人たちと一緒に何かに取り組むために1歩踏み出してほしい。そうすることで、より大きい成果を得ることができるとのメッセージがありました。

